

強制抑留を顧みて

島根県 松浦久雄

私は、大正十四年十一月十三日、島根県八束郡忌部村に生まれた。家業は農業。祖母、父母、兄弟の八人家族。昭和十五年、忌部村尋常高等小学校高等科卒業。昭和十五年十月、奉天満州陸軍航空廠に軍属として入隊、軍用機の修理整備に従事。昭和二十年三月、同航空廠に現役技術兵として入隊。兵には三八式歩兵銃または九九式短小銃、それに帯剣が支給された。軍服は冬二着、夏一着、肌着、外套、飯盒、鉄帽、雑囊等が支給された。軍事教練はあまりしなかった。

昭和十八年頃より満州各地の航空部隊は南方に移動し、昭和十九年十二月、アメリカ空軍B29数十機による奉天爆撃の際、迎撃に飛び立った我が軍は一式戦闘機（隼）二機（当時としては旧型機）だけ。昭和二十年に至っては、満州全体で戦闘に参加できる航空機は

皆無の状態。

二十年八月九日、ソ連軍が国境を越えて侵攻。奉天は国境からは遙かに離れていたが、部隊の大部分の兵員は、ソ連軍戦車隊の進攻を防ぐため幹線道路の戦車壕掘りに従事。機械工作部門は、航空部隊が練習機として使用していた複葉機に、戦車攻撃をするため爆弾を付ける装置、爆弾懸釣架の製作。

二十年八月十五日正午、全員集合、軍人軍属含めて四十人くらい。十九年末より二十年五月にかけて、空爆の被害を防ぐため航空廠、施設設備を各地に分散していたので、本隊から離れていた。終戦の詔勅放送は外地でもあり、あまりよく聞き取れなかったが、敗戦による戦争の終結と理解できた。六、七月頃より現地では、短波放送等による周囲からの情報で、このような事態は予測していた。奉天にも、八月十四、十五日には東満国境、虎林、虎東方面から前線部隊が撤退し、我々にも早く朝鮮まで南下しろと忠告してくれた。

ソ連軍が奉天に侵攻したのは戦車隊で八月二十二

日。それまでも市内では昼夜を問わず散発的に銃声がしていた。ソ連軍が入ると同時に、市内の工場倉庫は材料、製品、半製品の現地人による略奪が始まった。ソ連兵も、日本人を見れば腕時計、万年筆を奪った。

戦車隊は囚人部隊と言われ、程度は低かった。武装解除は、本隊より離れていたため、小銃、弾薬は地下に埋め、八月二十六日頃本隊に復帰。その日、ソ連軍に兵舎を没収され、市内の部隊官舎に移動した。護身用に手榴弾を二個ずつ支給され、ポケットに入れ持ち歩く。我々の部隊は軍属が大半であり、兵隊は中隊長がほぼ掌握し、ソ連軍の要請で北陵集結をほぼ決定していた。その折、軍属として入隊以来の上司中尉に相談したところ、これから冬に向かい食料、暖房用の燃料の補給等、現時点では目安がつかない。隊と行動を共にし、ソ連軍の指示に従えば飢え死にをさせるようなことはあるまい。君らに行けとも残れとも言えない。これからは君ら個人の判断で行動してくれとのこと。結局、隊と行動を共にすることにした。

九月十日、この頃になると奉天市内もソ連憲兵隊の

巡回が頻繁になり、表面的にはかなり落ち着いていた。そのような時、一人のソ連兵が日本人の腕時計を略奪するところを巡回中の憲兵に見つかり、その場で射殺、刑の厳しさを見せつけられた。

九月十五日頃であったか、隊は奉天北陵通信隊跡に集結。

九月十九日、奉天北貨物駅より貨車に乗り、二十日出発、北滿黒河への旅が始まる。食事は、輸送列車に炊事車両があり一日二食くらいであったが、何とか飢えを凌ぐ程度の食事はあったように思う。黒河まで約一カ月。同じ駅に一週間、一日一二日の停車は毎度のこと。当時の新京（現在は長春）を過ぎる辺りから、列車が止まる線路の両側に土饅頭が目立つようになった。墓標のあるものもあり、輸送途中、病気または栄養失調で帰国の望み空しくこの地に果てた同朋を偲び冥福を祈った。

ここまで来ると朝晩はめっきり寒くなる。小雨の降る日、無蓋貨車に邦人を乗せ南下する列車に出会った。頭から衣類を被り、体を寄せ合って寒さから身を

守っているように見えた。避難のため家を出るときは当座の着替え、食料は持っておられたであろうが、途中略奪に遭ったのか、本当に着のみのまま麻袋をまとっておられる姿もあった。北に向かう我々の前途を暗示するかなこの光景を見、誰も多くを語らなかった。

十月五日、北安着。朝から雪。奉天を発つときは、朝の飯盒の飯が夕方には腐るほど暑かったのに、北上するにつれ、だんだんと気分が滅入ってくる。十月二十日頃、満州領最終地点黒河着。奉天より一カ月。二日ほど留まる。夜は野営。付近から枯れ草を集め暖をとる。いよいよ国境。黒河から見た対岸ブラゴエシチエンスクは、ヨーロッパの田舎の風景を描いた絵のように見えた。黒龍江を渡るために河岸に下りる。岸の浅いところに、ソ連兵が使用する銃に剣を付けたものが沈んでいるのが見えた。開戦時の遺物であろうか。日本軍にも多くの戦死者が出たであろうと思うと感慨無量。渡河用船舶はアメリカ製らしかった。

ブラゴエシチエンスク、ここはソ連領。いよいよ列

車に乗り込む。貨車は二段仕立て、一車両二十五人くらいであったか？ 中央に石炭ストーブがあった。車内生活は満州領の時とあまり変化はなかったが、満鉄車両に比べ狭くギューギュー詰めで、夜中用足などで席を離れると、元の席には戻られぬような状態であった。シベリア本線ペロゴルスクに着く。東京ダモイとあれば列車は南下するはずだが逆に北上。口数は減り沈痛な雰囲気。外は寒く、停車時以外貨車の扉を開くことも稀であったが、外の風景は毎日同じ場所を走っているような錯覚を起こす白樺林と湿地帯。奉天を発って約一カ月半の列車生活と乏しい食事で体力も弱り、体の不調を訴える者が多くなった。特に下痢が多く、栄養失調が開始した。軍属時代、鹿児島出身の友人が十一月三日（明治節）、列車の医務室で栄養失調と神経衰弱で死亡。彼の持ち物の中から一番よい服を着せ、普通は駅でもホームなどで止まらぬ列車がホームで止まり、待機していたロシア人に引き渡した。異国で寂しく逝った同僚の冥福を祈り、敬礼をして送る。奉天を出発して初めての死者であった。

シベリアも都市のある駅に停車すると付近のロシア人女性が、日本兵の持つ衣料と彼女等の持つ食料の交換に来ていた（黒パン、馬鈴薯の蒸した物、パイカル湖周辺では鱒の燻製等）。この交換については、列車に同乗しているソ連兵の警戒が厳しいのと、日本側もこれからの越冬に備え禁止していたので容易にはできなかった。また、交換を求めるロシア人がいるということは、ここを通過する列車のソ連側指揮官、警備兵、日本側幹部の思惑で、それとなく見過ごしていたのであろう。目的地の収容所に着いた途端、官物、私物、一切の所持品は没収。途中で多少の危険はあっても食料と交換、一時の空腹を満たしておけばと残念に思った。停車駅では用足しのため扉を開けておくので、付近の子供が木の棒の先に鉤を付け、列車内の日本兵の装具をひったくるということもあった。特に酷かったのは列車に同乗のソ連警備兵。終着駅に着く二、三日前から日本兵の持つ目ぼしいものを強奪、次々と駅で一般の人に売るという行為。独ソ戦中、国内物資の欠乏は甚だしく、満州に侵攻したソ連軍将校は、

これだけの物資と食料があるのにどうして負けたのかと不思議に思ったという。

シベリア本線を走っている間、兵站基地のような所に入浴（シャワー）三回くらいと、列車給食より質の良い食料が四回くらい支給された。シベリア本線はベトロバブロフスクまで、ここから南下。乗車以来行き先など告げられることもなく、着いた所がカザフスタン、カラガンダ。昼頃であったであろうか、奉天より約二カ月の列車の旅。午後二時、装具約十五キロを背負い出発。雪の広野、遙か彼方の稜線に向かって歩いても歩いても近くならない。そのうち日は暮れ、警備兵の「ダヴァイ、ダヴァイ、ヴィストラ」のわめき声。心に鞭打ってなお歩く。寝たり座ったり、貧しい食事の二カ月にわたる列車生活で体も衰弱。下痢をしている者も多く、用足しをするため列から出ようとすれば警備兵に無理やり引き戻され、歩きながらの排出。七、八時間も歩いた頃か、私たちの少し前を歩いていた人が、ふらふらと列から離れ倒れた。同行の日本軍医もすぐ来て診たが既に死亡。警備兵の馬に乗せ

られ收容所まで運ばれた。駅を出発、積雪の道を十二時間。意識が朦朧としそうな時ようやく收容所に到着、午後二時だった。

スパースク收容所の門を入り整列点呼。このとき、我々の装具はすべて没収。翌日、ソ連側に装具の返却を求めたところ、ソ連側いわく「お前等がソ連領内に持ち込んだ物、チリ紙一枚といえどもすべてソビエト国家の物」。再三の交渉はあったようだが結局成らず。ソ連側の指示、日本側の要求交渉は奉天以来一人の通訳で行われ、不慣れということもあったのか、互いの意思の疎通は十分でなかったようだ。

この收容所は、ソビエト革命前はイギリス人が経営をしていた銅の製錬所跡であつたらしいが、その後は独ソ戦で捕虜となりカラガンダ地区炭坑で働かされ病氣となったドイツ軍側の病院施設となつていた。ここにはドイツ人軍医が多くおり、日本の軍医を介してソ連側の指示を伝達する方法もとられていた。收容所に着いた当座はドイツ人捕虜は我々をかつての同盟国と歓迎してくれたが、それも、宗教、文化、風俗、習慣

の違いから長く続かなかつた。最初に彼等の盥洗を買つたのが、同じテーブルで食事をする際、日本人はスーブを飲む時、飲む時に音をたてることであつた。隣り向かいのドイツ人が手まね、口まねで音をたてぬよう抗議するのだが、当時の日本人の食生活の感覚からそれがなかなか理解できなかった（現在であればテーブルマナーなどといった知識ですぐ理解できたであろうが）。そのうち日本人全員に、ヨーロッパ人と食事を共にする際には特にその点を注意するよう指示があつた。その後も彼等の前で、これが日本人の食事の習慣とばかり故意にする者もあつて更に反感を煽つた。

英語のできるドイツ人から英語のできる日本人を通じて、彼等がここに連れて来られた経緯や收容所での待遇、炭坑の労働条件の話等で、これから我々のする生活の輪郭がほぼつかめた。話の中で特に強く印象に残つたものは、彼等も話したくなかつたであろうこの收容所で起きた悲惨な出来事。それは、ドイツ軍がモスクワ近郊まで攻め寄つた頃のことか。食料は極端に欠乏し、所内ではチフスが蔓延、この極限状態で先を悲

観し自殺をする者、骨と皮になった死体の僅かに残る肉を食う者。まさにこの世の地獄絵、生きようとする者の凄まじい生への執念の話であった。

十一月に到着、翌年三月末までの期間は、収容所に通じる道路の除雪作業と所内で暖房に使うコークス集めであった。この地で銅の製錬に使ったコークスの燃え殻、灰捨て場で、燃え残りのコークスをふるいにかける選別し集めた。

ある時、ドイツ人のグループと除雪作業に出掛け、別々の区域で除雪をしたが、日本人グループは雪の中でも汗が出るくらい働き、疲れ、一斉に手を休める。警備兵が「ダヴァイ、ダヴァイ」と叱咤する。働き、疲れ、この繰り返し。この時、仲間の一人が、近くで作業をしているドイツ人グループを指さし「あれだ、あれを見よ」と説明を始めた。グループ全員が作業をしているように見えるが、四、五人は常に手を休め休憩をしている。作業はスローで汗の出るような働きぶりではない。警備兵も「ダヴァイ」とも言わずぼんやり突っ立っている。この統制のとれた行動を見習うべ

きと話し合った。次の作業日、休憩の順番、作業のテンポ等色々取り決めやってみたが、日本人の性格というか、他人が仕事をしている時、いかに交代制とはいえないんだ気がしない。作業テンポも個々に差があり、集団で統一、これも日本人には駄目だった。結局元に戻り、やるときはやり、疲れてくれば手を休めた。やがて警備兵も日本人の性格を理解したのか、手を休めていても、適当な時間を見計らい「ダヴァイ」と一言言うだけになった。

この収容所での食事も、食った時から空腹感。ノルマのあるような作業はなかった。入浴は一週間に一度くらい、衣服の消毒は二週間に一回（滅菌室で一一〇度C）、入浴の際に行われた。冬の寒さは厳しく、吹雪は特に凄かった。粉雪で風上にあたる建物の側は全然雪が積もらず、風下の側は屋根の底^{ひき}まで積もるといった具合。この雪も四月上旬、暖かい日が三日も続くと一斉に溶け、一年間に三日ほど流れる川ができた。

四月中頃、カラガンダ八収容所の人員補充のため移動。奉天以来の本隊、軍属時代の友人ともここで別れ

た。総勢二十人ほど。来るときは十二時間も歩いた雪道を、今度はトラックで一時間余りで着いた。健康状態も回復した。

ここは炭坑作業を主とする収容所であった。即日、所屬する小隊班が決まり、二三日は炭坑についての予備知識、作業の種類、坑内の危険防止、禁止事項等についての説明があつた。我々の入る炭坑は浅く、地表より垂直六十メートルくらいの採炭場。徒歩で斜坑を下り現場に。最初は選炭作業、その後は主に採炭。

三交代制で、ノルマは各人の体力等級、採炭現場の状況により異なるが、一級で十トン、二級で八トン、ノルマが達成できなくても罰則のようなものはなかった。ノルマの八十パーセント達成からプレミアが付き、一〇〇パーセントでパン、バターの支給があつた。しかし、これを目標に生産を上げる努力はしなかった。その日その日の出来に任せた。一つの採炭現場の構成は、ロシア側が監督。電気、設備保全、発破、坑内ガス検査、その他で七人、日本人二十人くらいの八時間交代三組制。番方の交代は一週間おき。採

炭現場はかなり通風はよくしてあるものの、発破、採炭等で出る炭塵で交代頃には作業衣を通し肌まで黒くなるような状態。それでも防塵マスクなどはなかった。これはロシア人、日本人も同じで、坑内作業の労働条件に差異はなかった。組織の編成替え等で働き場を再々変わることも少なく、ソ連側の人達とも顔なじみになった。

採炭場では停電、機械故障などで手を休めることが多かった。ノルマなど関係なく、一分でも一秒でもこの時間の長いことを願つた。故障にかかわりのない一緒に働いているソ連側の人（ロシア、カザフ、ウイグル、チェチェン、タタール、キルギス、ウクライナから来たゲルマン人）、その時により異なるがいろいろな種族が集まるので、片言のロシア語と身振り手振りで、人種、出生地、年齢、どうしてこのカラガンダに来たのか、いろいろと聞いた。それまで宗教の仏教、キリスト教、イスラム教は知っていたが、実際これらの人に接するのは初めて。時には宗教、戒律で論争が始まることもあった。

また身の上話で、ソ連の法がいかに厳しいかを知らされる話もあった。それは、ウクライナから強制移住させられたゲルマン人で、兄が酒に酔っ払い捕虜収容所の柵にもたれかかったところを望楼の監視兵に撃たれ、死亡したというのであった。収容所の柵の外側にはロシア語で「この柵に近寄るな、近寄った者は銃殺」、内側にも、そこに収容されている民族語で外と同じ内容のことが書かれていた。柵は三重で、中央が板壁。高さは三メートルくらい。鼠一匹通り抜ける隙間もなく、両側に三メートルほどの空間、そして有刺鉄線の柵。一定の間隔で望楼があった。

これだけ多くの民族、人種が集まっていると、風俗習慣の違いから起こる事件、男女間のいざこざ、亭主が夜勤で留守の間に妻が犯され、犯した男への報復の話、宗教もかかわっているのか、かなり残酷なものもあった。これはリンチ、後は法の裁きである。時にはこの話の輪に女性加わることもあり、空腹でその方面の感情から遠ざかっている、華やいた雰囲気になるのが不思議であった。坑内で働く女性も多く、採炭

場には坑内のガス検査、発破を掛ける人の手伝いの女性がいたので、話題もおのずと変わってきた。我々が彼等に接し話のできるのは坑内だけ。仕事は随分辛いが、こうして彼等と話のできる時間が楽しみであった。

十人寄れば六―七人は人種が異なり、連邦国家の構成民族が一目で見られるソ連共和国からの寄せ集め。カラガンダ人口の八〇パーセントが完全な市民権を持たぬ人達。刑務所出もいた。酒を飲んで喧嘩の果ての殺人。軽いものでは収穫後の国営農場で落ちこぼれの馬鈴薯を拾って家に持ち帰ったという罪。またソ連開戦当初、ドイツ軍はウクライナに侵攻。この地方に多数いたゲルマン民族は、ドイツ降伏後、同じ民族であっただけで祖国防衛戦最中に敵に協力したという理由で、裁判も何もなく、ある日突然、二十四時間以内に最寄りの駅に身の回りの物だけを持って集結させられ、行き先など告げられることなく着いた所がカラガンダだったという。他にもドイツ軍の捕虜になった者。変わったところでは、ドイツ軍将校の世話させ

られた女性。この人達は皆、腕に入れ墨があった。多民族国家でもあり、一緒に働くソ連側の人も日本人を特に差別をするようなことはなかった。

毎月一回、体力等級を決める身体検査があった。これは、収容所配属のソ連軍医（女医）の前で全裸の一行になり、顔色、外見でわかる病気の有無を見、回れ右をして、軍医が一人一人の尻の肉の付き具合をつまんで見、一級―三級までの等級を決める。一―二級は普通作業、三級は所内の軽作業、時には農場の収穫作業に出る者もあった。元気で常に痩せ、尻に肉の付かぬ人はいつも三級、こういう人が羨ましかった。健康管理など特に定められたものはなかった。朝夕の点呼もなし。炭坑往復の警備は当初はかなり厳重であった。二十三年頃、日本側から警備兵を付けるのを止めるように申し入れたが、ソ連側いわく「昭和十四年、ノモンハン戦争で日本軍と戦い、日本人に対し強い反感を持っている者もある、それらの者から日本人を守るため」とか？

二十三年、この頃になって坑内の特殊作業に就い

た。採炭後のコンベア移動、充填作業現場の状況で入坑時間が不規則、また少人数のため、警備兵はつかなかった。

衣類は、上着、ズボンは入ソ当時より変わらなかった。肌着は洗濯のため定期的に交換。冬でも上着、ズボン、肌着の上下だけ。炭坑往復、冬季は毛皮の外套とそれに防寒帽、これだけでの吹雪の日の往復は寒く辛かった。

収容所施設の建物は日干し煉瓦を積み上げたもので、厚さ四十センチくらい。採光窓は二重ではあったが、割れガラスを二重にし枠に入れたもの。室内暖房はベチカ。肌着一枚でも過ごせる程度に温度を保つことはできた。寝台は上下二段式の蚕棚。上段は梯子で上り下りするが、冬は下段よりちよつと暖かった。燃料の石炭は採炭場より小脇に抱え持ち帰った物。石炭の持ち帰りは炭坑側がうるさく、その度ごとに小競り合い。規則を楯に拒む側と、持ち帰らねば寒い思いをする日本側。このやりとりにしびれをきらした警備兵の「ヤボンスキー、ダヴァイ」の一声で一件落着。

往復の警備に付く兵士は内務省管轄で収容所側。このような場合、日本人の肩を持つ。ソ連三大炭坑の一つ、カラガンダと言っても、この地区の収容所に配分される石炭の量は少なく、収容所は持ち帰りを歓迎した。

いつものように石炭を小脇に抱え収容所に向かったが、途中で道が変わり変だと思っていたら、着いた所が警備兵の宿舎。石炭置き場にその石炭を置けと言う。一日の仕事で疲れ果てた体、斜坑で出口までは登り坂、石炭まで抱えているので楽ではない。この時は腹が立った。「このバカッターレ、クソッターレ」と叫び、精いっぱい力で投げつけた。反感を表した我々の態度にもさほどの反応も示さず「ダモイ（帰る）」の一言。このくそ落ち着いた態度、小馬鹿にされたように更に腹が立った。このことは収容所側に報告し、その後二度となかった。

抑留期間中一番辛かったのは労働より空腹であった。特に二十一年から二十二年までは、量は変わらなかったと思うが質が悪かった。黒パン、穀物を粥状に

煮たもの、スープ。スープの中は時期によって異なるが、馬鈴薯、人参、玉ねぎ、それに羊の肉。この肉は、運のよい人にそれらしき筋のようなものがたまに入る程度。青い野菜など入ったことはなかった。年間を通じて多かったのがトマトスープ（熟さない青い実を塩水で保存、これをスープに入れる）、これは酸っぱく、好きではなかったが、当時は、腹に入れ一時の空腹を紛らわしてくれる物なら何でもよかった。各自に支給される黒パンの目方は厳密で、将棋の駒ほどのものでも楊枝で添えてあった。パンも中ほどより両側の皮の多い方が好まれた。胃の中で水分を多く吸収し膨張するとか？ 収容所で使用する野菜、トマトの塩漬け等は地下倉庫にあり、食堂に運ぶ使役に当たると皆喜んだ。生でも何でも口に入る物はポケットに押し込み、持ち帰った。人参はそのまま丸かじり。馬鈴薯は、冬季ベチカのあるときは焚き口で蒸し焼き。当時は食うことだけが関心のすべて。生涯で最も精力旺盛なこの時期、去勢でもされた人間のようなものであった。食事は食券で支給され、多くの人の中には器用な

人がおり、この食券を偽造、再度食事にあつづく者まで現れた。

炭坑は、一週間に一日の休日はきちつと守られていた。全員一斉ではなく交代制であった。炭坑から上がり入浴、食事後就寝までの時間は雑談、将棋、花札、麻雀をする人もあった。食料事情がかなり良くなった二十三年頃からは、食パンを賭けてやっている人もあった。

娯楽ではソ連映画の上映。記憶にあるものは「石の花」「シベリア大地の歌」「列車は東に行く」。物語の適当なところで止め、通訳がそれまでの筋書きを説明する。この映画を見るため収容所の職員、家族、子供まで大勢詰めかけた。時にはドイツ人（捕虜）で編成する管弦楽団が来ることもあった。これまで管弦楽の演奏など聞くことのなかった私には驚きであった。演奏は所内の屋外劇場であり、この時も映画と同様、職員、家族も多数来ていた。演奏開始五分前には演奏者は所定の位置につき、指揮者の出るのを待っていた。待っていた聴衆のロシア人も日本人も一斉に、早く始

めるよう拍手やロシア語で促したが応じなかった。開始時間になるときちつと指揮者が現れ演奏が始まる。

これがドイツ人かと認識を改めた。生まれて初めて聞く生演奏。感激などすることのない日々の生活に、潤いと人間性を取り戻してくれた貴重なひとときであった。後日聞いた話では、この指揮者はベルリンフィルハーモニーを指揮されたことのある方とか。捕虜であっても文化人、芸術家といった類の人は待遇が別であった。

二十一年も終わり頃であろうか、ハバロフスクで発行される『日本新聞』を見るようになった。勉強会といった小グループも出来始め、食堂の壁新聞にも民主化運動云々の記事が目につくようになった。それまで人を楽しませていた娯楽記事は、だんだん場所を奪われていった。収容所全体の一つの組織になるまでには時間がかかった。中堅幹部育成のマルクス・レーニン主義の講義。講師を務めるのは当時、大学出の赤カブ組（表面は赤くても中身は白い、身の保全組、炭坑などには入らなかった）。そのうち青年行動隊という組

織もでき、壁新聞にはソ連謳歌の記事、民主化、反動分子、帝国主義、日和見主義、これらの文字の羅列が多くなった。時には吊るし上げによる自己批判の集会もあるようになった。こうなると組織、リーダーの批判も小声になる。逆に初めのマルクス・レーニン主義の講師たちには批判の声が出始めた。各収容所にはソ連側の政治委員、名称は覚えていないが、このような肩書の者が所内の日本人の動向に目を光らせていた。我々の収容所にいたのは朝鮮人で、日本語もでき、文字も読める人で、よく食堂で壁新聞を見ていた。この人は気の毒な身の上で、故郷、朝鮮にいる時漁に出て、ソ連領海侵犯で逮捕、この地に連れて来られたとか。彼の故郷では、帰ってこないから遭難ということにでもなっておろうか（当時は日本の植民地で、どのように処理がされていたのか）。

抑留中一番辛かったのは、前にも書いたが空腹、飢えであり、それでも炭坑は重労働で、一般地上作業者より食料が二〇パーセント増しということであった。帰国後シベリアの森林伐採の方から話を聞くと、炭坑

は危険であってもまだ恵まれているということであった。

抑留の間、我々は「この地で死ねない」というのが合言葉。帰国の念空しくこの地で逝った同胞の埋葬の話など聞くと、絶対に死ねないという、信念にも似た気持ちを持ち続けた。舞鶴に上陸できればその場で死んでもよい、途中は無蓋貨車でも石炭貨車の上でもよい、とにかく舞鶴に帰りたいという一念であった。抑留の間、年改まる度に、今年は帰れる、今年は帰れると四度。

二十四年の夏も過ぎ、朝夕に寒さを感じる九月末、炭坑から上がり、この日は近くの商店でも覗いてみるかということできつくりして帰ったら（この頃になると、ロシア人の酒を飲む小遣いくらいは貸してやれる程度の金は持っていた。その当時は炭坑の保全、充填作業で七―八人の小グループで入坑。不定期作業で、五―六時間で終わることもあれば八時間以上かかることもある。炭坑の往復には警備兵は付かない）、営門で待ち受けていた女性職員（通称「お猿さん」という

ニックネームの女性」が飛び出してきて、「皆、どうして帰りが遅いのか？」私の名を呼び「なぜ仕事に出るのか、日本に帰りたくないのか」と言う。これは収容所の名簿カードの取り扱いミス。我々が炭坑に出た後、帰国者の名簿発表、点呼があったが、この時いなかったで、すぐ炭坑事務所に連絡したらしい。しかし、我々は既に仕事を終えて収容所に帰る途中であったので、収容所に戻って初めて帰国を知らされた。

十月一日、この日は朝から雪。嬉しさと不安が半々。不安は、ダモイと言ってまた他の地区に移動させられるのではないかとということ。収容所の半数がこの日の帰国。門の前には四年間見慣れた収容所の職員全員、まわりには、後に残った人達が見送りに集まっていた。後に残った人達には悪い気もしたが、互いに手を振り別れ、門を出た。門の外には、この日の日本人の帰国をどうして知っていたのか、多数のロシア人が集まり見送ってくれた。輸送に当たる警備は厳重で、この人達を近づけなかった。この地に着いて満四年、その間の出来事が次から次と脳裏に浮かぶ。特

に、冗談を言いながら一緒に働いていた同僚が不幸にして病気に侵され、この地に眠っていると思うと、心の中で「済まぬ」と合掌。飢えに耐え、寒さに、重労働に耐え、ただ帰国だけを望みに生きてきて、どうして一緒に帰れなかったのかと思うと、己の帰国だけを喜ぶわけにはいかなかった。

貨車に乗り込む。カラガンダ発、北上、ペトロバブロフスクへ。これよりシベリア本線。いつか見たロシア映画「列車は東に行く」、映画の題名そのまま、帰りには通過する駅名も読めるようになり、心の片隅にある、他の地区への移動ではないかという不安も徐々に薄らぐ。沿線の風景は葉を落とした白樺林。来る時も帰る時も、同じようでも随分変わって見えた。バイカル湖、暗く沈んだ思いでこの沿岸を西に向かったあの四年前が再び蘇る。でも今度は確実に東に走っている。水平線の見える美しい風景も、素直に美しく心に映る。十月半ばともなるとシベリア大地はそろそろ凍結の時期。沿線の川も岸から氷が付き始めている。東に東にと進んでいた列車も向きを南に変えた

頃、移動するソ連軍部隊と出会った。貨車から降りて
いるとソ連軍将校がやって来て「兵隊、どこに行くの
か」と聞くので「日本に帰るのだ」と答えると、「日
本に帰るのか、それはよかった、シベリアに雪は積も
っていたか」と言うので、「少し」と答えると小さく
頷いて去って行った。日本軍将校が兵隊にものを言う
ような威圧的態度でなく、好感が持てた。

遂にハバロフスク。黒龍江にかかる大鉄橋を渡る。

帰国間違いないと確信。ここまで来ると帰国を疑う者
もいなくなった。カラガンダ出発、ナホトカまでの二
十日間。民主化運動の旗振り青年行動隊のメンバーが
来ては、「我々は舞鶴上陸後いかに行動すべきか」な
どと熱弁を振るい、聞く者は「もっとも」という顔を
して聞いていたが、「そうだ、そうだ」などと言って
同意の相槌を打つ者はいなかった。

ソ連領から帰国の旅の最終地ナホトカ。初冬のシベ
リアを通過してきた体にはナホトカは暖かった。舞
鶴上陸のためこの地に着くには、無蓋貨車でも石炭貨
車の上でもよい、心に念じて満四年。遂に実現。四年

の歳月は長かった。到着して一週間余り、近くの建設
現場の作業に駆り出された。作業のないときは大衆集
会が開かれ、その度毎に徹底した所持品検査。ソ連側
の指示でもあろうが、それに輪をかけ、赤旗振りの横
柄な態度に腹が立った。軍隊時代、苛められ抑圧され
た鬱憤晴らしであろうか？ 九年前、故郷を出た時か
ら持っていた明治時代の硬貨もこの時取られた。入ソ
以来、ロシア人が行った所持品検査も幾度かはあった
が、日本硬貨など没収することはなかった。同胞と言
うべき日本人に取られたと思うと更に腹が立った。

ナホトカに着いてからは国防省の管轄で、食事も内
務省の時より質も悪く量も減った。帰国を目前にこの
ようなことに神経を尖らす者もいない。明日は乗船。
抑留最後の夜は眠れなかった。

起床。天気は晴れ、風もなく穏やかな日和であつ
た。引揚船の待つ岸壁まではそう時間はかからなかつ
た。九年ぶりに嗅ぐ潮の香り。日ソ両国の国旗を掲揚
し、岸壁に横たわる引揚船永徳丸。いよいよ乗船開
始。タラップの前でソ連側が読み上げる名前を日本人

が復唱し、確認して乗船、最後の人が乗り込むまではかなりの時間がかかった。甲板では「お帰りなさい、長い間ご苦勞様でした」とねぎらいの声をかけ、温かく迎えてくれる人々。四年ぶりに見る白衣姿の看護婦さん。これらの人がかけてくれるねぎらいの言葉に、大部分の人は「帰りました」とか「ありがとうございます」と言葉を返すのに、ごく一部の人間は、心の病で笑顔もなくなり、言葉も忘れたかのようにブスツとして乗り込んでくる。民主化運動の旗振り連中。船のタラップも外され、いよいよ出航。岸壁にはソ連側の引揚業務に携わる人。「頑張れ」と我々に叫ぶ旗振り連中。その中に、カラガンダから婦国列車のソ連側軍医として我々のいた収容所の女医さん、それに女性職員の人。ナホトカに着いて既に十日。彼らの職務でもあっただろうが、最後までそばにいてくれたと思うと、心の中で「ありがとう」と言い、大きく手を振って別れた。

岸壁の人が小さく見えるようになった頃、全員船室に入った。船室といっても貨物船。区画が区切られた

所定の場所に落ち着く。どれだけ時間が経ったであろうか、船内に広がる味噌汁の香り。四年間待ちに待った白いご飯の食事が始まる。飢えと寒さ。どれだけ食い物の話をしたであろうか。出港以来、海も穏やか。船内の旗降り組も平穩。三日目の昼頃より祖国日本の地が見え、あと数時間もすればいよいよ舞鶴。船は舞鶴湾に入る。兩岸の山は紅葉し、十年ぶりに見るこの景色。日本に帰ったという思いを新たにする。この日は上陸できず船内泊。

十一月四日、小雨。舁はしりに乗り換え栈橋に。そして無事元気で舞鶴の土を踏むことができた。この瞬間を夢見、この日のために耐えた四年間の歳月は辛く長かった。感慨無量、思わず涙が込み上げる。沿道には全国から県名を記した旗を持ち、大勢の人が出迎えに来てくださった。ここは日本。日本人だけ。長い外地生活で、常に心の片隅に持ち続けた警戒心もほぐれ、心に着せていた鎧を脱ぎ捨て爽快な気分になる。この日は平引揚寮。ここで健康診断、婦国手続その他諸々。十一月六日、引揚寮を後にバスで東舞鶴駅に着いた。駅

の周辺には、未だ帰らぬ身内の氏名を記した幟を立て、消息を知る者がいないか、駅に着く人々に尋ねて回る姿が目立った。汽車が故郷の駅に近づくにつれ、忘れかけていた古里の言葉が懐かしい。九年前、見送られて旅立った駅。そしてわが家。途中、大きな山が目前に迫り圧倒されるような恐怖に似た錯覚。山など見ることもない生活が長かったためか。

帰国後は、実家で農業を一年余り。その間、大企業の従業員募集に度々職安を訪れ、応募職種、条件等は合っていたが、全部不合格。その頃が各企業に労働組合の結成が始まる頃で、赤旗の国を経験した人の大部分がその選から外された。その後、県内企業で希望する職種の募集があり、採用され、定年まで勤めた。

あとがき

あれから既に半世紀が過ぎた。人間、幸か、不幸か、過去の悲惨な経験、不幸な巡り合わせは、楽しかったこと、面白かったことに比べ早く忘れるようになっていくように思う。あの飢えと寒さ、厳しい労働、望楼のある三重に巡らされた柵の中の収容所、炭坑の

行き帰りの厳重な警備、この基本的な肉体、精神的な苦痛は記憶に残るが、作業現場、収容所で起こった出来事で、当時はロシア人個人に対する恨みなど数多くあったが、今は強く心に残っていない。今でも強く心に残っているのは、帰国列車がナホトカに近づいた頃の出来事。旗振り青年行動隊の連中が、かなり年配の准尉の持っている勲章を見つけ、「この反動、帝国主義者め」と罵り「即刻降ろして元の収容所に送り返せ」と輸送指揮官に申し出たところ、指揮官いわく、「この人もかなりの年齢、日本に帰ったらその先、この勲章で年金を受け取り暮らさねばならぬ体、この件については指揮官に任せろ」で一件落着。抑留四年の間、いろいろな民族、種族の人達と一緒に働いたが、日本人の境遇に同情的で好意を示してくれたのは、有色の人よりヨーロッパ系ロシア人の方が多かったように思う。

この戦争で、アジアだけでも何百万人の人が犠牲になった。戦争に駆り出された日本兵が、祖国に帰ることなく今も赤道直下のジャングルの中に、巨大な鉄塊

と共に太平洋の海底に、そしてシベリア大地、凍土の下に眠っていることを思う時、何故この戦争が、誰がこの戦争を……と欲してしまふ。

シベリア抑留体験記

岡山県 田 中 一 司

シベリア抑留から帰国後五十余年、抑留生活の悪夢も遠い思い出となっている今であるが、三年半の抑留生活の細かいことは忘れたが、苦しかったことは決して脳裡から消えないで、五十年前のことが昨日のことのように強く心に残っている。

私の体験と共に、ソ連のウズベックスターンにあるアングレーンという炭鉱町で抑留生活をされた池田幸一氏が書かれた『虜友記』の中から抜粋して記述する。

昭和二十年八月十五日、終戦。満州鞍山飛行場の戦闘指揮所で玉音放送を聞いた。

ソ連軍の命令で我が部隊は、鞍山昭和製鋼所の工員寮を宿舎として、自動車で毎日朝八時から午後五時まで製鋼所の解体作業を実施した。現場には自動小銃を構えたソ連監視兵がついていた。作業監督は邦人で、我が中隊は選鉱場といって山から掘ってきた鉄鉱石を粉碎して、水流によって鉄をとり出すのである。

いろいろな機械を分解、切断して貨車に積みこむ。この解体作業は昭和二十年九月から十一月中旬ごろまで続き、我が部隊は鞍山の某小学校に集結した。ここで食糧の米を靴下に詰めこみ、缶詰、携帯燃料、下着、防寒用衣類など、自分の力で持てる限りの食糧と衣類をリュックサックに詰めこんで鞍山駅まで歩いた。同胞の日本人に涙を流して見送ってもらった。汽車に乗ったら内地に帰ることができるだろうと勇み足だった。駅に着いてみると客車ではなく貨車であった。一貨車に約八十人乗ったのであるが、貨車の中に長い板がたくさん積んであった。

夕暮れ時汽車は出発した。戦友たちが磁石を見て、どうやら北に向かっていていると言った。車中では雑談